

半井本系統『平治物語』本文考

原水民樹

半井本系統に属する『平治物語』の伝本は、現時点では残欠本や取り合わせ本を含めて八本の存在が確認される。それは、

国立公文書館内閣文庫蔵半井本（閣）

彰考館文庫蔵半井本（彰）

広島大学附属中央図書館蔵本（上巻のみの残欠本）（広）

長谷川端氏蔵本（下巻のみの残欠本）（長）

静嘉堂文庫蔵本（中巻のみの残欠本）（静）

彰考館文庫蔵鎌倉康豊本（下巻のみの残欠本）（鎌）

実践女子大学山岸文庫蔵本（三巻中、中巻のみ該当）（山）

学習院大学図書館蔵天正二十年松尾監物奥書本（三巻中、

下巻のみ該当）（監）

である（伝本名の下（ ）内の文字は、小稿で用いる略号）。

永積安明氏の諸本体系⁽¹⁾においては、半井本系統として閣・彰の二本のみが掲げられていたが、その後の調査の進展により、現在は右の如く考えられている。この中、静・鎌の二本は、永積体系では金刀本系統に属せしめられているが、谷

口耕一氏の見解⁽²⁾に従い、小稿では半井本系統に組み入れた。監は、その位置づけについて種々議論のある伝本だが、本誌掲載別稿「金刀本系統『平治物語』本文考」での検討結果に従い、下巻のみを半井本系統とした。長は長谷川氏が架蔵本を紹介されたもので、山は日下力氏が紹介された伝本である⁽³⁾。広は今回新たに付け加えた。長並びに山については原本未見であり、各々翻刻に依る⁽⁴⁾。

なお、半井本系統と金刀本系統の関係については、半井本系統を金刀本系統の後流本と見る谷口氏の見解に従うものとする。

該系統に属する八伝本は、巻数・巻区分に異同がある。その異同を大まかな形で図示すると次のようになる。巻区分の位置を、坂詰力治・見野久幸氏編『半井本平治物語本文および語彙索引』（武蔵野書院 平成九年）（閣を底本とし、彰を対校）の頁・行をもって示した。例えば（38―2）は第三十八頁第二行を示す。

彰	閑	広	長	鎌	静	山	監
上 (3 8 — 2)	上 (8 1 — 4)	上 (8 2 — 2)	上 (9 1 — 7)	上 (4 8 — 6)	上 (6 2 — 7)	上 (4 8 — 6)	上 (4 8 — 6)
中 (8 2 — 2)	中 (8 1 — 4)	中 (8 2 — 2)	中 (9 1 — 7)	中 (4 8 — 6)	中 (6 2 — 7)	中 (4 8 — 6)	中 (4 8 — 6)
下 (8 2 — 2)	下 (8 1 — 4)	下 (8 2 — 2)	下 (9 1 — 7)	下 (4 8 — 6)	下 (6 2 — 7)	下 (4 8 — 6)	下 (4 8 — 6)

現存部の中、半井本系統本文を持つ部分を実線で、他系統本文を持つ部分を破線で示した（八十一頁は第四行が終行で八十二頁第二行に続く）。右図に明らかのように、全文半井本系統の本文を伝えるのは閑・彰の二本のみであり、他は残欠本或いは取り合わせ本である。そのため、論が煩瑣に亘る場合がある。

一、伝本間における記述の有無
初めに、半井本系統中、伝本間で有無の異同が見いだされ

る記述中より、二十音節以上のものを掲出する（小稿にいう音節は、音韻論的音節（モーラ）の意である。なお、伝本間で字句に異なる場合、いずれの伝本に依るか、また、漢字の読み方によっても計数にいくほどの誤差が生じるが、各項での引用本文で数えた。従ってここに得られた数値は一つの目安に過ぎない）。掲出に際しては、振り仮名は省略し、旧字体・異体字は、私意により通行字体に改め、参考として、上掲の坂詰力治・見野久幸氏編活字本における頁・行を示す。例えば、（1—1）は、該当本文が第一頁第一行にあるか、もしくはそこから始まることを示す（同書に相当本文が存在しない場合は、あるとすれば入るべき位置を推測して示す）。また、影印本が刊行されている彰・鎌（古典研究会叢書『平治物語』上巻 汲古書院 昭和四十九年）本文の引用に際しては、（影）としてその頁・行を示す。

(1) 文にも非ず武にも非ず能もなく芸もなし只朝恩にのみ

はこれり祖父八年たけ齡傾ひて纔に従三位までこそ至しか（10—3）

本文引用は広による。閑・彰には傍線部相当記述がない。当該部は文脈上必要な詞句であり、閑・彰における欠脱と判断される。

(2) 天竺震旦ノ事マテモ残所無アリノマヽ二答ヘケレハ

唐僧我国ヨリ渡レル物カ此国ヨリ渡テ学ヒタルカト問ハ（六行分略）種々ノ引出物ヲシテ行去ヌ又信西我朝ノ詞ニテ奏シケレハ君ヲ始進テ供奉ノ人々不思議ノ思

- (7) ヲ被成ケリ (2—6)
本文引用は闇による。広には傍線部相当記述がない。なければならぬもののので広における欠脱と判断される。
- (3) 清盛が大鳥宮に献詠した和歌が広には記載されていない。広における欠脱と判断される。(3—2)
- (4) 常陸国ニハ関ノ次郎時員上野国ニハ大胡大類太郎信濃国ニハ片切ノ小八郎大夫景重 (4—7)
本文引用は闇による。彰には傍線部相当記述がない。彰における欠脱である。
- (5) 抜丸をひん抜てしと打たれハ熊手のゑを手本より二尺計おいてつんと切熊手を被切て八町次郎のけにたうれて (5—9)
本文引用は広による。闇・彰には傍線部相当記述がない。恐らくは「熊手」の目移りに起因する欠脱と判断される。
- (6) 軍する迄ハ思も寄すあはれ隙有ハ落ハやと落道をのミそ尋ける六波羅ハ寄すして手勢五十余騎 (6—8)
本文引用は広による。闇・彰では傍線部が「アハセテ (アハシテ)」とある。この形でも意味は通じるが、金刀本系統が広と同形であることよりみて、恐らく闇・彰には省略を伴う改変があるう。
- 後国ヘソ流レケル (7—5)
民部少輔基頼ハ陸奥国ヘ流レケリ尾張少将信時ハ越
- (8) 本文引用は闇による。広には傍線部相当記述がないが、欠脱あるいは省略と判断される。
- (9) 左衛門佐重盛ハ伊与国を給て伊与守とそ申ける三川守頼盛ハ尾張国を給て尾張守とそ申ける (7—9)
本文引用は広による。闇・彰・山には傍線部相当記述がない。恐らくは「盛ハ」の目移りに起因する欠脱と判断される。
- (10) 一首かうその給ける道ヘの草の若葉に駒とめて猶ふる郷そかへり見らるゝ闇の冷水を見給て恋しくハさても見よとて (8—7)
本文引用は広による。闇・彰・山には傍線部相当記述がない。欠脱である。
- (11) 佐殿申御渡候佐殿ヤ御座ト呼奉レ共見給ネハ帰参テ御渡候ハスト申ハ (8—7)
本文引用は闇による。山には傍線部相当記述がないが、恐らくは「御渡候」の目移りに起因する欠脱と判断される。
- (12) 男力寝醒シテアレハ此上ニ落人ノアルヤラント云ハ妻女ト覚テ女ノ声ニテ落人アラハ如何ニ (9—1)
本文引用は闇による。彰は傍線部が後人による行間書き入れである。恐らくは「落人」の目移りに起因する欠脱と判断される。
- (13) うきめ見せさせ給ふないつかたへもしのはせ給へと申ける佐殿此よし聞給ひ今ハなにをかかくすへき (9—3)
1) (影 28—3)

本文引用は鎌による。長・山には傍線部相当記述がない。欠脱と判断される。傍線相当部、闇・彰は「ト云へハ」、監は「と申けれハ」とし、簡略ではあるが文脈に問題はない。

(13) 鎌田しはらくとそ申ける閨屋の内より兵一人出て申けるハけにも左馬頭殿おちするにいかに無勢なりとも (96—4) (影²⁸—5)

本文引用は鎌による。闇・彰・山・長・監は傍線部「申ケレハ」とする。欠脱か省筆だろう。

(14) 此船ニ乗テ下ラントハヨモ思ハシ疾々通レトテ柴木ヲモ如本取入早下ト云へ共急モ下ス (9—5)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。

欠脱か省略だろう。金刀本系統諸本は、東京大学国語研究室蔵本(略号「東」)を除いて闇と同形。

(15) 扱鎌田ハいかに有へきそ鎌田ハ助たくハ候へ共定て助かるましき仁にて候へハ鎌田をハ近く呼寄て酒を飲せて軍の様を問せ給ハん程に (9—8)

本文引用は監による。闇・彰・長・山・鎌には傍線部相当記述がない。相当文は文脈上あってもなくてもよい。

(16) 安録山ハ楊貴妃ヲ失奉子息安芸主ヲ手ニ懸テ失ニ事安芸主ハ子息ノ師子命力手ニ懸失ル (10—1)

本文引用は闇による。長・鎌には傍線部相当記述がない。欠脱か省略だろう。金刀本系統の学習院大学日本

語日本文学研究室蔵宝玲文庫旧蔵本・内閣文庫蔵本並びに京図本系統の早稲田大学図書館蔵柙型本は長・鎌と同形。

(17) 免角誘奉リ暇申テ走出或寺ニテ髪ヲ切法師ニ成テ諸国七道修行シテ (10—2)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。欠脱である。

(18) しうちかまへに飯を結構してすへ悪源太の御まへにハふさいの飯をすへたり其時しうちついたつて我まへなる飯を悪源太の御前にさしをき御まへに候ふさいの飯をとりてしうちくひけれハ (10—9) (影³⁰—7)

本文引用は鎌による。監には傍線部相当記述が、闇・彰・長には二重傍線部相当記述がない。いずれも「御まへ」「御前」の目移りによる欠脱だろう。

(19) 悪源太平家ヲ伺トテ六波羅ニハ騒給後日聞ヘテ悪カルヘシトテ六波羅ヘ参リテ (10—2)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。恐らくは「六波羅」の目移りに起因する欠脱と判断される。

(20) 悪源太東近江ニ知タル人ヲ憑テ下暫休トテ下ラレケルカ会坂山ニ立入暫休ミ給程ニ (10—7)

本文引用は闇による。彰には傍線部相当記述がない。恐らくは「暫休」の目移りに起因する欠脱と判断される。

(21)

其御形見ニ見奉ント思ツル夜又御前ニモ追奉ル我身モ生テ何カセント歎ケレハ母ノ大炊様々ト誘ケリ (112—8)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。欠脱である。

(22)

頼朝さられて候ともなからん果報来へきにても候ハすたすけさせ給ひて候とも果報うすへきにてても候ハす (11—8) (影⁷32—4)

本文引用は鎌による。闇・彰・長・監には傍線部相当記述がない。当該部は直前の文と対句関係にあり、文脈的にはなくても問題はない。欠脱か省略のいずれかだろう。金刀本系統中、東・宮内庁書陵部蔵本(略号—書)・早稲田大学図書館蔵津田葛根識語本が闇などと同様に欠く。

(23)

七歳ノ年ヨリ月参不解ス十三ノ年ヨリ月毎ニ一部法花經解ス (11—9)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。

「不解」「解ス」の目移りによる欠脱か。

(24)

松根ニ立テ宿トルヘキ木影モ無ク人ノ跡雪ニウツモレテ間ヘキトサシモ無リケリ (12—1)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がなく、「トサシ」が「とし」とある。欠脱だろう。金刀本系統の東・大東急記念文庫蔵屋代弘賢旧蔵本(略号—屋)はこのあたり大きく欠く。

(25)

平家ノ一門侍共ニ至マテ皆六波羅ヘソ参ケル清盛侍ヘ出給常葉ニ寸面シテ (126—7)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。欠脱である。

(26)

ケニ家盛力姿ニ少モ違スアワレ都辺ニ置テ家盛力形見ニ常ニ呼寄テ見慰ハヤ (13—3)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。恐らくは「家盛力」の目移りによる欠脱と判断される。

(27)

疾々ト宣ハ御前ヲソ出ラレケル同三月十五日官人共相具シテ都ヲ出ラレケルカ (13—9)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。恐らくは「出ラレケル」の目移りによる欠脱と判断される。

(28)

ワツカニ一本計残サセ給スワ守康給レトテ投出サセ給ツルヲ守康給食スル共覚ス懷中スル共覚スシテ (13—2)

本文引用は闇による。鎌には傍線部相当記述がない。

金刀本系統の東京国立博物館蔵本にはほぼ同様な場所に欠脱が見られ、また、彰考館文庫蔵京師本にも当該箇所を含む大きな欠脱がある。

(29)

老母の候か重病をうけて候間おほつかなふ候とて (135—6) (影³⁴6—6)

本文引用は鎌による。闇・彰・長・監には傍線部が「も」とある。省筆であろうか。

以上、半井本系統八伝本のいずれか（複数の場合も含む）が欠く二十音節以上の記述を掲出し、それらの各々について若干の説明を加えた。ただし、伝本間で有無の異同がある場合でも、明らかに衍文とわかるものは採らなかつた。また、静は、半井本系統中、特に個性の強い伝本であるため、掲出に際し判断に苦しむ場合が少なくない。従つて、静については、二十音節を越える場合でも半井本系統中該本のみが欠く記述並びに該本のみが有する記述の一切を採らず、別途考察する。また、前述したように、半井本系統の伝本は、闇・彰の二本以外は残欠本或いは取り合わせ本であるため、比較できる部位が大きく限られる。残欠本並びに取り合わせ本で比較可能な項目は次の部位である。広(1)〜(9)、長(10)〜(29)、鎌・監(11)〜(29)、静(5)〜(10)、山(6)〜(16)。なお、金刀本系統については、伝本間で異同のある場合のみ言及した。それら及び(2)(15)を除く項目については、金刀本系統の全ての伝本に傍線部相当記述が存在している。

二、内閣文庫蔵半井本・彰考館文庫蔵半井本・広島大学附属中央図書館蔵本について

まずは、比較的広範囲の比較が可能である闇・彰・広三伝本の本文性格と親疎関係の検討から始めたい。闇・彰は全卷存在する完本、広は恐らくは上・下二卷の中、上巻のみの残欠本である。上掲二十九項中、広の現存部相当について三本の各々が欠く記述項目を摘出すると、闇(1)(5)(6)(8)(9)、彰(1)(4)

(5)(6)(8)(9)、広(2)(3)(7)となり、闇と彰は、(4)を除く五項が共通している。一方、広の場合、三項すべてが固有の欠脱（或いは省略）である。この事実によつても、闇・彰・広三本の親疎関係は明白である。当該三本中、闇・彰が近しい関係にあることは、闇・彰が片仮名交じりであるのに対し、広が平仮名交じりであるという表裏面から、また、闇・彰が上・中・下三卷本であるのに対し、広が恐らくは上・下二卷本であつただろうとの巻立て面から、ある程度予測されるが、本文面からもこのことが確かめられる。

闇・彰の近似を示す事例をさらに求めるなら、

行幸ハ六波羅ヘト承候御幸ハ六波羅ヘト承候御幸ハ何方ヘ候ソト被申ケレハ(8—6)

との記述中、傍線部は重複である。掲げたのは闇の本文だが、彰も同じ現象を呈している。また、

泰頼ヲ召・御寝所ヲ三度礼シテ出ニケリ(中略)廿六日晩事ナレハ折節御寝所ニ置セ給ヘハコワウヒヲシキニテ御マナヒヲ仕ル程ニ延サセ給ヌラント恐ケレハ月ヲホロニテ御前モ御覧シ分ヌ(・は私に補入したもので原文にはない)(3—9)

との記述には混乱が認められる。これは、本来・部にあるべき傍線部記述が何らかの理由によつて現在の位置に誤入したものである。掲げたのは闇の本文だが、彰も全く同じ混乱を伝えている。

この他にも、微細な詞句の段階において共通の誤りが数多

く見いだされる（彰では、それらの多くは後人恐らくは水戸史臣の手によつて是正されている）。

以上述べたことより、関・彰両本の近似性が極めて高いことが知られる。彰はその奥書から、「森尚謙伝借」するところの「半井驢庵家藏本」を元禄四年に写したものと知れる。一方、関には、題簽に「平治物語 半井氏家藏 上（下）」（本文とは別筆）とあるが、彰の親本となつた「半井驢庵家藏本」そのものではない。そのことは、両本が互いに本文を補正し合う関係にあることから明らかである。両本は、現存本をさほど溯らない時点で共通祖本にたどり着く関係にあると推測される。彰には上掲の欠脱に加え、広が欠く下巻にも二十音節以上の固有欠脱が二箇所（(11)(20)）見いだされる。しかし、関にはそれほどの規模の固有欠脱（或いは省略）はない。この事実を重視するなら、関の方が彰よりは純良な本文を伝えていえるといえようか。

次いで、広について述べる。前掲のごとく、関・彰に存在し、かつ広に存在しない二十音節以上の記述は三項見いだされる。(2)(3)(7)がそれにあたるが、これらは全て広固有の欠脱或いは省略である。三項と数は少ないものの、(2)の場合、唐僧と信西の問答の一部が、関にして約八行分欠けている。この他にも、小さな脱字・誤字の類が少なからず見いだされるので、純良性の面で関・彰より特に勝れているとはいいがたい。しかし、上述の如く、表記法や巻区分並びに欠脱（省略）部位が関・彰二本と一致していない事実から、広は、「半井驢

庵家藏本」とは異なる流れに立つ伝本の姿を伝えるものと推測される。その意味で、上巻のみの残欠本ではあるが、広は、関・彰を溯る半井本系統の姿を探る上で意義を持つ伝本と考えられる。

三、長谷川端氏藏本について

次に、長の本文について考える。長は、恐らくは上・下二巻の中の下巻のみの残欠本と見られ、本文は、上巻のみ現存する広の後を受ける。また、表記が平仮名交じりである点広と同じである。広の現存部（上巻）と長の現存部（下巻）を併せることにより二巻仕立て本の姿が復元できるということになるうか。

系統中、長が欠く二十音節以上の記述は、(12)(13)(15)(16)(18)(22)と七項あるが、(15)を除くすべてにおいて、傍線部相当記述を持たない長の形は不注意による欠脱或いは意図的省筆に起因すると判断される。各項における他本との関連性を見ると、(12)は山と一致し、関・彰・監に近い。(13)は関・彰・山・監と一致、(15)は関・彰・鎌・山と一致、(16)は鎌と一致、(18)は関・彰と一致し、監に近い。(22)(29)は関・彰・監と一致している。ただし、冒頭の図から明らかなように、対校可能な部位は広にはなく、静はごく一部、山は中巻後半のみという制限があるが、傾向としては、長は、鎌よりは関・彰の方により近い本文を有していると判断される。さらに、字句を子細に追う時、長・関・彰三本中では、関と彰がきわめて近い関係にあ

り、長はこれらとは少々離れる本文を伝えていることが分かる。全体的に顕著な固有本文が見られず、二十音節を越える規模の固有欠脱もないことよりして、丁寧な書写がなされた伝本と見てよいだろう。

四、彰考館文庫藏鎌倉康豐本について

永積説では、鎌は金刀本系統に属せしめられている。確かに、語彙単位から詞句単位に亘り、金刀本系統本文との符合箇所が相当数見いだされることは否定しがたいものの、やはり谷口氏の指摘の如く、総体としては半井本系統に属すると判断される。

まずは半井本系統中、鎌が欠く二十音節以上の記述を掲げると、(14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28)の十二項である。その中、
 関・彰・長・山と共通する(15)、長と共通する(16)を除く十項が鎌に固有である。そして、その各々については当該項で略説したように、傍線部相当記述を持たない鎌の形は、不注意による欠脱もしくは省筆により生じたものと考えられる。このことより、鎌は、不注意に起因する固有の欠脱や省筆を比較的多く有する伝本と捉えられる。

該本が總體としては半井本系統に屬する伝本でありながら、その一方、語彙單位から詞句單位に亘つて金刀本系統との符合が相當数見いだされることは前に述べた。(12)(13)(18)(22)(29)の各項において、傍線部相當記述を有するのが半井本系統中では鎌のみであり、かつ、鎌の形が金刀本系統の全本若しくは大

多数の伝本と一致している事実からも、金刀本系統との類似性は確認される。

如上、總体としては半井本系統に属するが、金刀本系統との合致も少なからず見いだされる鎌を諸本体系中にどう位置づけるかが問われる。この点については、該本を、金刀本系統から半井本系統に移行する形態を伝えた過渡本と見るか、或いは、半井本系統本文を基盤としながら所々に金刀本系統本文を採りこんだ混合本と見るか、二様の可能性が考えられる。そして、このいずれが蓋然性が高いかと言え、半井本系統中、鎌のみに見られる固有記述(12)(13)(18)(22)(29)の各々において鎌の形が妥当であり、かつ、それが金刀本系統の全本もしくはは大多數の伝本と一致するという事実を、半井本系統が金刀本系統から生み出されたとする谷口説に突き合わせるなら、該本を、金刀本系統から半井本系統の闇・彰・長へと移行する過渡性を伝えた伝本と見るのが穩当ではあるまいか。なお、金刀本系統を含む全系統を通じて見た場合、該本にはとりたてての固有記述は見あたらない。目を留める程の固有記述がないという事実は、金刀本系統から半井本系統の闇・彰・長の如き形の伝本に至る道筋を推測するに際し、鎌が有効な伝本であることを意味している。ただ、先述したように、該本には不注意に因ると思われる比較的規模の大きい欠脱(或いは省略)が相当数見られる点が惜しまれる。

五、実践女子大学山岸文庫蔵本について

山については、上巻が独自本文、中巻が半井本系統、下巻が京図本系統の本文を持つ、取り合わせ本であることが、日下氏により確認されている。⁽⁶⁾ 日下氏の指摘の如く、山の上巻には独自性が認められるが、他系統との径庭を探れば、半井本系統に最も近い本文を持つ。金刀本系統に比した場合の半井本系統の最大の特徴は、信西の才学に係わる記述を大きく欠く点にあるが、山（上巻）には当該記事が存在しているので、該本が半井本系統と緊密な関係にないことは明らかである。しかし、詞句の次元では金刀本系統よりは半井本系統に近い箇所がより多く見いだされ、しかもこの現象は後になるに従い、より顕著となる。このことよりすれば、上巻をも半井本系統との関係で捉えるべきかとも思うが、なお、明確さを欠くため、小稿では日下氏の説に従い、中巻のみを半井本系統として考察の対象とする。ただし、その巻区分のあり方は独自であり、山の中巻部は闊・彰の中巻後半から下巻前部に相当している。

系統中、山が欠く二十音節以上の記述をあげると、(8) (9) (10) (11) (12) (13) の六項が掲出できる。系統内の他本との関連性を見ると、(8) (9) が闊・彰と共通、(10) が山固有、(12) が長と共通、(13) が闊・彰・長・監と共通、(15) が闊・彰・長・鎌と共通、である。この場合もまた、闊・彰を除く他伝本とは部分的な対校しかできないので、共通欠脱（省略）数を計数しても余り意味はない。ただ、静ではなく、闊・彰・広・長に近い本文を伝えられているといえそう。

以下、山とこれら四伝本との類似性を見る。(7)に見るように、広は「尾張少将信時ハ越後国ヘソ流レケル」（本文引用は闊による）との一文を欠くが、山は該当文を有する点で闊・彰・静と一致している。しかし、一方では、(6)に見るように、広に「軍する迄ハ思も寄すあはれ陳有ハ落ハやと落道のをミそ尋ける六波羅ヘハ寄すして手勢五十余騎」とある傍線部が闊・彰には「アハセテ（アハシテ）」とあり、この場合、山は広・静に一致している。また、(16)の「安録山ハ楊貴妃ヲ失奉子息安芸主ヲ手ニ懸テ失ニ事安芸主ハ子息ノ師子命力手ニ懸失ル」（本文引用は闊による）の部分は、闊・彰・監と一致し、鎌・長と異なっている。このように、山は、闊・彰及び広のそれぞれと符合箇所を有しており、このことよりこれら三伝本とはほぼ等間隔に位置するように思われる。ただ、微細な字句に着目した場合、闊・彰に近い部分が多いようなので、いずれかと言えば、やや闊・彰よりの本文を持つかと思われる。誤字・脱字等本文の詳細については、注（4）に掲げた翻刻の頭注に詳しく記されているので参照されたい。

六、静嘉堂文庫蔵本について、

静は、永積氏の諸本体系では金刀本系統に属せしめられているが、谷口説では半井本系統の一伝本として扱われている。該本は中巻のみの残欠本だが、後半部は固有性が極めて濃いため、これを既存の系統中に収めえるか否かの議論もあり得るかと思うが、基本的には半井本の本文を基盤としている

と判断されるので、小稿では谷口氏の見解に従い、ひとまず、半井本系統に属する一本と考えておく。ただし、永積説も一蹴されるべきではない。というのも、該本には、金刀本系統の本文と符合或いは類似を見せる部位が鎌の場合以上に多く見いだされるからである。以下、静本文がひとり半井本系統から離れ金刀本系統のそれと符合或いは近似する事例を掲げる。

① 草の陰にてもいかに憤りふかからんしかいのうへに鬱憤をやすめんためにこそとて人申ける (0—1)

右は静の本文である。闇・彰・広・山には傍線部相当記述がない。ある方が文章として適切なので、闇などの形は欠脱を生じたものと判断される。金刀本系統は静と同形である。

② 長刀もちて走出兵衛佐を見付奉りて御馬の口に取つて申けるハ (8—9)

静の本文を示したが、闇・彰・長・山には傍線部相当記述がない。闇などの形は欠脱或いは省略と判断される。金刀本系統は静と同形。

③ 鎌田佐殿と申いかにいままて見えさりつるそと仰られければ馬ねぶりを仕り打をくれまいらせ候

同じく静の本文であるが、半井本系統の他本は相当部を

鎌田佐殿ニテ御渡候ト申ハ尾籠ニテ候ヘ共馬睡ヲシテ打追レ進候ヌ (8—1) (本文引用は闇による)

と記し、やや説明不足の感がある。これは、恐らくは、金刀本系統に見られる

佐殿にて御わたり候と申せハ頭殿いかに今迄みえさりつるそと宣ヘは尾籠にて候へとも馬ねぶりを仕てうちをくれまいらせ候ぬ

(本文引用は蓬左文庫蔵本による)

の如き形の傍線部相当記述を、「ハ」「は」の目移りにより欠落させた故と思われる。対して、静の場合、字句に小異が見られ、また「尾籠ニテ候ヘ共」に相当する字句を欠くものの、半井本系統の他本が欠落させたと思われる傍線部相当記述を金刀本系統と同じく有している。

④ 朝長龍下にての疵おもく成て返参給ふ頭殿たそとの給へは朝長にて候龍下にてきすをかうふりて候しか伊吹の雪のしのかたふて罷帰り候と申されければあつはれ不覚なる者かな

半井本系統の他本は相当部を

朝長落ラレケレ共龍毛ニテノ疵井吹ノスソ野ノ雪ハ凌タリ疵イト、ヲモリテ大事ナリ然ハ帰参リ候ト申サレケレハ哀不覚ナル者哉 (8—6)

(本文引用は闇による) と記し、文脈にやや飛躍が認められる。これは、恐らくは、金刀本系統に見られる

朝長そなたへと心さしおちられけれども龍下にて

の疵井吹すその雪はしのかれたりきすいと、おも
りて大事なりしかハ帰り参り給ふたそと宣へは朝長
にて候なと下ぬそとの給へハ龍下にて疵を蒙て候し
うへ井吹の雪ハしのか候ぬ疵いと、おもりて下へし
とも覚え候ハす中々と存て帰り参りて候と申されけ
れハあハれ不覚なる物かな

(本文引用は蓬左文庫蔵本による)

の如き形の傍線部相当記述を、「帰り参り(て)」の目移
りにより欠落させた形と推測される。対して、静の形は、
総じて簡略で固有記述も見いだされるものの、他の半井
本系統諸本が欠落させている傍線部相当記述に類似する
本文を金刀本系統と同じく有している。

右掲の事例から明らかなように、静が金刀本系統と同じも
しくは近似する記述を所々に有している事実が確認できる。
このことより、静は、半井本系統本文を基盤としながらも、
一方で金刀本系統とも係わりを持つ伝本と認識される。永積
説を一概に否定できない所以である。

上記の如き現象を呈する静を、諸本体系中のいかなる位置
に据えるべきか、前述の鎌と同じ問題が生じるが、この場合
も金刀本系統本文と近似する事例のすべてにおいて、静の本
文が他の半井本系統諸本のそれよりも整合性が高い事実より
して、静を、金刀本系統から半井本系統の閥・彰などに移行
する過渡的性格を持つ伝本と見るべきではないか。

静を半井本系統に属させるべきとする谷口氏の見解には概

ね賛意を表するものだが、半井本との近似性が確認されるの
はほぼ前半部についてであり、後半、特に季札・徐君故事あ
たりを境として、より固有性の濃い本文に変貌してゆく。該
本の本文にかなり濃い固有性が見られることは、これまでに
掲げた事例によってもある程度窺えるが、より明白な事例を
左に掲げる。

① 季札大將軍にてかの国へ進発しければ徐君かもとへよ
りていとまこひつゝ出んとしけるに徐君申けるハ年来
こひ申つる劍この太刀にかへてたへと申けれはいさと
よ宣旨たびあひすせめに他国へむかふなりもし帰る事
あらはそのときあたふへしとて打出ぬ三年と申せは夷
をほろほしてかへりけるとき徐君かもとへ打寄ていか
にとむかひけれハ女なくゝ立出むなしくなりてはや
三年になりぬとこたふ季札あまりにあハれにおほえて
かのはかはいつくそと問ければあれそとをしへけり打
より見れば塚に松そおひたりける存生のときもとめし
けんなればかやうになればとて争約束をへんすへきな
れは塚の松のえたにかのけんをかけてそとをりける

当該部、半井本系統の他本は、

季札ヲ賣ニ遣ス徐君カ許ヘ打寄テ暇ヲ乞ケレハ同
シ如ナル太刀ヲ取出アノ劍ニ替テタヘト云ハ宣旨ニ
随イ夷ヲ賣ニ他国ヘ向也歸時トラスヘシトテ打出ヌ
三ケ年ニ夷ヲ歸ケル時徐君カ本ニ打寄イツクヘソ
ト問ケレハ女位立出空ク成三年ニ成ヌト答フ墓ハイ

ツクソト云ケレハアレソト教ケリ打寄リ見レハ墓ニハ松ソ生タリケル存生ノ時節シ劔ナレハ草ノ影ニテモウレ敷思フヘシトテ松ノ枝ニ劔ヲ懸テソ通ケル(6
— 3) (本文引用は関による)

とし、静とは校合が困難な程の異同がある。特に傍線を付した部分については相当記述が他方にみいだせない。金刀本系統諸本は静以外とほぼ同文。

② 源氏の勢ハ今朝よりかなたこなたにてせめたゝかひけれハつかれむしやなり平家の勢ハあら手なり悪源太かなハしと思ハれけん少馬のいきをやすめんとて門の外へ引しりそき川より西へそ引れける

当該部、半井本系統の他本は、

悪源太ノ勢ハ今朝ノ疲武者也平家ノ勢ハ今荒手也悪源太ノ勢少弱ク見ケレハ更ハ馬ノ氣ヲツカセヨトテ門ヨリ外へ引退キ懸テ河ヨリ西へ引レケリ(6—1) (本文引用は関による)

とし、系統中、静のみ異なる。金刀本系統諸本は静以外とほぼ同文である(ただし、東・屋は一部に欠脱(或いは省略)を持つ)。

③ やかて主上へ御書まいらせ給ひて信頼をはたすけをかせ給ふへうもや候らんと二三度申させ給へとも御返事なかりければ上皇ちからおよはせ給ハス

当該部、半井本系統の他本は、

應信頼ヲハ扶置セ給ヘウヤ候覽ト主上へ御書進セ給

共御返事モ被渡セ給ス又丸ヲ憑テ参タル物ニテ候扶サセ給ヘト御書アリ然共御返事モ申サセ給ネハ上皇力及セ給ス(7—2) (本文引用は関による)

とする。静を他本と比較すれば、静には簡略化を伴う改変が施されていることが知られる。金刀本系統諸本は静以外とほぼ同文(ただし、東は大異、屋は貼り紙にて補筆)。

④ 馬ともミなつかれてはたらかされは乗すてさしもの物くともをもぬきすてつゝおち給ふこそ哀なれ去程に又兵衛佐殿行をくれ給ひぬ頭殿尋よとの給へは鎌田たちかへり尋申けれどもさらに見え給ハねハかへり参り御わたり候ハすと申けれハ頭殿頼朝をは身をはなさしとおもひつるにかやうにはなるゝ上ハ義朝いきてもなにかせん自害せんとし給へば

当該部、半井本系統の他本は、

馬ニテモ可延共覚ネハ秘藏ノ馬共捨給ヘリ雪次第ニ深く成物具シテモ叶ネハ左馬頭殿ノ立無悪源太ノ八龍大夫進ノ澤鴈兵衛佐ノ産衣ヲ始トシテ秘藏ノ鎧共雪ノ中ニソ脱捨ケル頭殿ニ兵衛佐殿又打追給フ人々ハ待マウケテ誰力候ハヌソト宣ハ鎌田兵衛又佐殿コソ御渡候ハネト申ハ其尋ヨト宣ハ鎌田立帰佐殿申御渡候佐殿ヤ御座ト呼奉レ共見給ネハ帰参テ御渡候ハスト申ハ頭殿イツクマテモ頼朝ヲハ身ヲ離シトコソ思ツルニカシコニテモコ、ニテモ頼朝ニ別ヌルコソ悲ケレ敵ニ

捕レテ斬ル、カ雪ノ中ニテ空ク成カ生ル事ハヨモアラ
シ義朝生テモ何カセン自害シテ同道ニ行ントテ已ニ自
害セント云給ヘハ(8—6)

(本文引用は関による)

とする。両者を比較すると、静の場合、特に傍線を付し
た(a)(b)(c)において文章の刈り込みが見られ、
また全体的に改変を施していることが知られる。金刀
本系統は、静以外の諸本とほぼ同文(ただし、東・屋
・書は一部に欠脱(或いは省略)を持つ)。

⑤ 延寿遊君とも参り取つきまいらせいかにうきめをは
見せ給ふそと申けれハ誠にきらんにはあらずいさめん
ためなりとて太刀をさしをき給ヘハ

当該部、半井本系統の他本は、

延寿ヲ始テ遊君共参ケルニ延寿ハ先ニ参タリ此由ヲ
見奉テ如何ニ憂目ヲハ見サセ給ソト頭殿ニ取付奉ハ
実ニサルヘキニハ非ス余ニ心ノ不覚ナル間諫為ナリ
トテ太刀ヲサシ置給ヘハ(8—9)

(本文引用は関による)

とする。両者を比較すると、静は、やはり文章を刈り込
みつつ(静には傍線部相当記述がない)、本文改変を施
していることが知られる。金刀本系統は、静以外とほ
ぼ同文(ただし、東・屋・天理図書館蔵南天荘・月明
荘旧蔵本・静嘉堂文庫蔵松井簡治旧蔵本・同蔵玄圃斎
旧蔵本は一部に欠脱(或いは省略)を持つ)。

以上の事実より、静は、総体としては半井本系統と認識さ
れるものの、金刀本系統との符合箇所をも少なからず有し、
かつ後半になるに従い文章の刈り込みを伴う本文改変の様相
を濃厚に見せる伝本と認識される。このことより、金刀本系
統から、半井本系統の関・彰・広の如き姿に移行する過程の
本文を基盤として、それに抄出を伴う大胆な改変を加えた伝
本として該本を位置づけることが可能ではないかと思う。

七、学習院大学図書館蔵天正二十年松尾監物奥書本
について

監に関しては、その位置づけについて先学の見解が相違し
ている。ただ、本誌掲載別稿「金刀本系統『平治物語』本文
考」で述べるように、稿者としては、該本を、上・中巻が金
刀本系統蓬左本系列、下巻が半井本系統の本文を持つ取り合
わせ本と見るべきではないかと考えている。下巻を半井本系
統に組み込むか、半井本に近い本文を持つ別系統とみなすか
も議論のあるところである。確かに、監下巻には、少なく
ない固有字句が見いだされるが、二十首節を越えるものは一箇
所(前掲の(15))のみで、他はそれに満たない規模である。こ
の事より、該本(下巻)を半井本系統中に収めて大過ないと
判断した。

以下、監下巻の本文性格について述べる。結論を先に記す
ならば、それは、鎌よりは関・彰・長により近い位置にある
といえそうだ。理由は簡単である。即ち、鎌が、他の半井本

系統諸本と異なり金刀本系統と合致している(12)(13)(18)(22)(29)五項のすべてにおいて、監は鎌以外と一致或いは近似している事実並びに鎌に見られる比較的規模の大きい欠脱(或いは省略)(14)(16)(17)(19)(21)(23)(24)(25)(26)(27)(28)十一項について監と一致するものがない(15)は、関・彰・長も鎌と共に欠く)事実よりして、監が、鎌ではなく関・彰・長に近い本文を有することが納得される。

要するに、監の下巻は、半井本系統の関・彰に近い形の文本に小規模な増補・改変を施した伝本と認識すべきもので、金刀本系統から半井本系統に至る過渡本と見るべきではないと思う。

まとめ

残欠本・取り合わせ本をも含めて半井本系統の本文を持つと判断される八伝本について、各々の本文性格・相互関係等について考察した。結果として、広が関・彰とは近似しつつも「半井驢庵家蔵本」とは異なる流れに立つ伝本の姿を伝えているだろうこと、長は本文面で広の後を受けるものであり、関・彰とはやや離れていること、山がやや関・彰よりの本文を伝えていること、鎌は金刀本系統から半井本系統の関・彰の如き形に至る過渡形態を伝えているのではないかということ、静も鎌と同様な位置にあると思われるが、改変色が濃なこと、監には、過渡的性格はなく、半井本系統の後期的性格が見られるのではないかということなどを一応の結論として

得た。

〔注〕

(1) 『中世文学の成立』(岩波書店 昭和三十八年)。以下に引く同氏の論は当該著書による。

(2) 『平治物語』諸本・本文研究の課題―諸本の分類と相互関係の整理に向けて―(『軍記文学研究叢書』平治物語の成立)汲古書院 平成十年)。以下に引く同氏の論は当該論文による。

(3) 早稲田大学蔵資料影印叢書『軍記物語集』平治物語解題(早稲田大学出版部 平成二年)。

(4) 長谷川氏『平治物語(下)』略解題・翻刻(『中京大学文学部紀要』第三十二巻 文学部国文学科創設三十周年記念特集号 平成九年三月)、日下氏他『山岸文庫蔵『平治物語』解題・翻刻』(『実践女子大学文芸資料研究所別冊年報』VI 平成十四年三月)。

(5) 関が、彰の親本そのものではない明徴を一、二示す。

① 彰に「逆臣亡事無疑」(影8―4)とある箇所、関には「逆臣亡事 無」と、「事」と「無」の間に一字分の空白がある。これは、恐らくは、関の親本(或いは更に溯る段階)において、虫損に類するような不都合が生じており、本文が正確に読み取れない状態であったことを窺わせる。が、彰

には適正な形が記されている。

② 閣に「頼政力郎等」とある「郎等」が、彰には「放等」(影1217)とある。この事実は、彰の親本である「半井驢庵家藏本」の段階で、「郎等」を「放等」とする誤りが既に生じていたことを示しており、「郎等」と正しく記載する閣が彰の親本でないことは明らかである。

なお、閣の外題に「半井氏家藏」と記されている所以を考えると、該本に付された冊子『保元平治物語附録 半井氏家藏 全』中に、寛延四辛未年仲春の年記のもと、「今現存ノ本再ヒ参考ト校合スル処ニ水戸侯参考ニ與ル処ノ半井本ト称スル者則此書也板本トハ間異アリ珍書タリ」と見える。この記事より、寛延四年(一七五一)に、ある人物が、該本を『参考平治物語』と「校合スル」ことにより、これを半井本系統の一本と判定し、それに基づいて、閣の外題に「半井氏家藏」の語を記したものと推測される。

(6)
注(3)の解題。